# なびが変わります。

歴代なび（'07～'12年）

## なびリニューアルのおしらせ

日頃のなびご愛読をありがとうございます。ときには応援を、ときにはお叱りを受けながら、西成の片すみからまちのうごき、地域の人たちの声、西成の文化やアート、ナイスという小さな会社が営む事業の宣伝、および社会的活動の紹介などをお知らせしてきました。

なびは２００７年１月に創刊し、おかげさまで本年４月で７年目を迎えることになります。会社が発信するタウン誌をつくる計画をはじめてから、まちの情報やイベントだけに限らず、私たちをとりまく社会の出来事、政治、経済からも学ぶことができた７年でした。

そしてこの機会になびの脱皮を考えてみました。脱皮とはなにやら生きものたちの生長観察みたいですが、今後はなびの年間計画にそって新スタッフのもと、これまでの冊子づくりの視点や編集方向を活かしながら、新しい器としてのタウン誌にしていく意気込みです。新年度の４月号からなびは変ります。楽しみにお待ちください。

なび編集長


発行日　2013年３月１日
創刊日　2007年１月１日
発　行　株式会社ナイス
発行人　代表取締役 冨田一幸
印　刷　㈲前山企広
住　所　大阪市西成区長橋3-6-33
電　話　06-6563-1156
E-mail　info@nice.ne.jp
Ｈ　Ｐ　http://www.nice.ne.jp/

## 友織者たち４
# ブラザー的支援をモットーに

**株式会社ソーシャルプランニング流（ながれ）　代表者：藤井　健（精神保健福祉士）**

**藤井さんは 17 年前から、精神障がい者によりそう作業をしていた。2010 年「就労創造センター　せふぃろと」（就労継続支援Ａ型事業）を立ち上げ、2012 年には「共生労働センター　カサンどら」（就労移行支援および就労継続支援Ｂ型事業）を創業し、株式会社として社会的困難な人たちに接している。藤井さんはそれをブラザー的支援と呼んでいる。**

**インタビュアー：佐々木敏明／記録：安田壽斗**

## 就労のお手伝い

佐々木（以下　佐）：この仕事への動機や会社について聞かせてください。

藤井（以下　藤）：　僕は現在の会社に至るまでに、まず社会福祉の仕事をやろうとしていました。株式会社を設立しハウスクリーニングをはじめました。過去にさかのぼって平成６年ごろ、精神障がい者の家族会が設置していた作業所のスタッフとして活動し、社会復帰施設（福祉工場）を考えていたが、上手くいかなかった。いろいろと考えた結果 NPO 法人より株式会社のほうがやりやすいと考え 2009 年に株式会社を設立し、2010 年 5 月に「就労創造センターせふぃろと」を立ち上げた。これは、障がい者の就労環境を創造することで、新しい雇用形態を作ることが目的でした。

会社を設立する前にＮＰＯ法人で運営するか就労移行支援をするか等、取締役と論議をしましたが、僕のわがままで押し切り気合いだけでつくった形になり、自立支援法に基づく事業として就労継続支援Ａ型をしていました。また、株式会社にした理由は、ＮＰＯだとやりたいことをやるときに協調性など気にして、問題がすぐに行動に移せない。ならば株式会社という形にして、できるだけ大きな権威が欲しかった、というのが正直なところです。精神障がい者が仕事に意欲を持ってもなかなか雇用が難しい。それを支えるようにしたいというのが起業の動機です。

佐：就労継続支援Ａ型をするという理由は何だったのか？

藤：平成６年頃に精神障がい者の作業所に勤めだし、初め、精神障がいがどういうものかということが全くわからなかった。薬が強いということもわかっていなかったので、薬の副作用で手が動かない、目が釣り上がっていることなども身体障がいに近いのかなと考えてしまっていた。そんななか、みんなと一緒に内職していました。そして、平成 7 年頃にみんな「働きたい」という意欲がすごいということを知り、同時に「こんなに一生懸命働いているのになぜ、みんな一般の仕事場で働けないのだろう」と考え、しかし「いける」と安易に考えていた。平成 7 年頃　当時和歌山に「麦の里」という福祉工場があり、作業所を見学にいった。福祉工場を知れば知るほど「こんなん作りたいな」と考えるようになった。福祉工場を早く作りたいという気持ちはすごくあったのだが、職員体制、自分自身が精神障がい・法律等というものを何もわかっていなかったということで、まず知る努力から始めました。現在ならわかることもそのときは全く分かっていなかったので、何もわからぬまま仕事をしていたと思う。

## 就労継続支援Ａ型・Ｂ型※

佐：会社を立ち上げた際、会社は順調に動きましたか？

藤：全然順調ではなかった。気合いだけで作ったところがあり、作ったけれど理想が大きく中身が追い付かなかった。１年目は銀行融資資金を食い潰す日々が続いていた。そして、翌年の１月には「会社自体がつぶれる」と思い、その年の５月がリミットで、やめようとまで考えていた。しかし、ちょっとした出来事で会社が良い動きに変わってきた。それは、大阪市からの請負事業を受けることでシステマチックに動けるようになってきたこと。今まで、恰好だけで中身を作る努力はしていたが、障がい者の人材育成のための資金繰りもなかった。しかし、事業を受けることができたので、人材育成の時間が確保でき、大きな変化となった。このため、人をもっときちんと育てる環境を作るために出来たのが就労移行事業である「共生労働センター　カサンどら」で、心の安定がはかれる場所を作ることが

できました。

佐：A型からB型に移行する人たちもいるでしょう。

藤：います。やはり気持ち的にしんどいものがあったりするので、B型で登録しなおす人もいます。昨年の法改正に伴い、障がい者の方はA型に通うのに週２０時間労働が基本となった。週２０時間未満でも構わないが、事業費が減算され事業所運営に影響してしまう。そのため週２０時間労働できる人が優遇される。精神障がいの人は不安定で、働けるときはみっちり働けるがそうでないときもある。なので、この法は精神障がいの方にとってはしんどいものになってしまっていると思う。割り切ってしまうオーナーはどんどん切ってしまうと思う。現在他事業所で切られてしまった人が「カサンどら」に流れ着いてきている人もいます。

＊就労支援A型・B型＝「就労継続支援事業所」を通し、障がい者自立支援法に基づく就労継続支援をするための施設。一般企業への就職が困難な障がい者に就労の機会を提供し、生産活動を通じて、その知識と能力の向上に必要な訓練など、障がい福祉サービスの供与を目的とする。同事業所にはA・B二種類の形があり、A型は障がい者と雇用契約を結び、原則として最低賃金を保障するしくみの雇用型。B型は契約を結ばず、利用者が比較的自由に働ける非雇用型。

## 許容とは人間観をひろげること

佐：市の助成金とか事業費を得て？

藤：助成金はなくて事業費だけ。ＮＰＯなどは助成金などがあるが株式会社なので助成金はない。

佐：事業費はどんな受け方？

藤：障がい福祉サービス事業（就労継続事業A型が「せふぃろと」・就労移行事業兼就労継続支援B型が「カサンどら」）を障がい者が利用した際に発生するサービス利用費を国保連に請求します。

佐：会社設立からの３年間でとくに印象深かったエピソードは？

藤：会社設立前の精神障害者地域生活支援センターで働いていた時が最も大変だった。いろんな出来事が多すぎて、その中で自分のキャパシティがすごく広がった。なので現在関わっている人たちは自分の中で（語弊がありますが）興味深い生き方をしている人ばかりという印象。だから会社でのことは大変とは感じない。今は毎日いろいろあって楽しいです。しかし、時には難しいケースもあり、なかなか対応が厳しい人もいる。ただ、長いかかわりが自分たちの関係性を変化させたり、柔らかくしていくことが出来る。それは自らの視野を広げていくことにもつながる。例えば音楽を例にすると、ロック・Jポップ・Kポップ、テクノなどさまざまなジャンルの音楽があるが、ある人にとってこの音楽が好きなので、他の音楽には興味が無いとか、あまり聴かないというふうに趣味の一面性が見えることがある。しかし、偶然聞いた曲が自分の興味外のジャンルではあるが、大変気に入ってしまったということもある。そんな時、何かしら視野が急に広がった気がするし、新しい見方を得ることもある。全然違った価値観を持って拒んでいたことが価値の変換で、どんな音楽も聞こうとする許容ができる。人間の付き合い方もそれとよく似ているような感じがします。

佐：それは目からウロコみたいなものだね。既成の概念で埋められた頭が、まったく自分とは違う世界や行動を発見して、一挙に視野を広げたり、心の持ち方を変えたりもする。それは人間観や世界観を広げること、いわゆる人への許容にもつながるんやね。

## ブラザー的支援

藤：自分の前からのスタンスなのだが、「ブラザー的支援」を心掛けている。知り合いが困っていたり悩んでいたりする場合には助けることが大切。知人友人はすなわちブラザーであると思う。自分は「ブラザー的支援」としてかかわりたいと考えている。精神保健福祉士の資格はあるが、資格とは関係のない友人関係を作っていきたいし、そんな支援のあり方で仕事をしている。私たちの仕事は人生観や社会観を大切にする仕事でもある。人生観が大きくないと社会を大きく見ることができないと思う。私は府社協の巡回相談員をしたことで、とくに社会観を豊かにできたと思っている。また、従来からある支援という言葉もきらい。傲慢で正義を強制する感じがします。

佐：国の法律や制度からこぼれてしまう人たちをしっかりとケアし、応援したいと思っています。最後にこれからの課題は？

藤：精神障がい者に対して「自立支援法のあり方」に疑問を感じている。法律の中で、人間の“ともに生きる”という精神が欠けているのではないか。一番大切な、誰に対してなすべきかが置き去りにされて、組織の論理や管理体制に重きが置かれている。これからも支援をする側は何が大事かを忘れないようにしていかなければならない。私に何ができるのか。あるいは何かできるようになりたいと思っています。そして事業も大きくしたいと考えています。

## おわりに

現在、藤井さんと共通となる被受給者を応援していますが、作業を通じて藤井さんの「支援者」という言葉への疑問に共感しています。支援者というよりブラザーという感覚で、友人になろうとするほうがよほど楽しいという言葉は、私のスタンスでもありました。変な義務感や正義感とは別のところで、応援活動を続けたいと藤井さんは話しています。音楽や美術の分野にも話が及び、狭い福祉という概念から距離を置いたスタイルにも同感。障がい者だけでない、地域の困難者に耳を傾けるパートナーとして、これからも協力をしたいと思っています。時間があればもっと現場の事例を聞きたかったです。

**「ダイアログ」はこの号を持って終了します。ご愛読を感謝いたします。（佐々木）**

新しいものが幅をきかせ、それまで使われてきた道具は捨てられる
便利さや能率が、文化という人の営みや育みを追い払う
知恵や工夫こそが、生活を支えるみなもとと考えるなび編集子は
かつてわたしたちが活用してきたものたちに登場してもらおうと考えた

第17回

# 文楽2

## ―仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）から―

**（前号から続く）**

映画では吉良上野介のイジメに耐え切れず、内匠頭が江戸城中松の廊下で刃傷沙汰を起こし切腹する。赤穂城が取り潰され浅野家一党が離散し、復讐すべく大石内蔵助を頭領として、吉良の首級（しるし）をうつための辛苦が語られ、首尾よく目的を果たし、赤穂浪士たちは浅草泉岳寺に向かうのです。

通し狂言を見て、映画には見られない忠臣蔵のエピソードを見ることができました。

その一つ目は２つの刃傷沙汰が松の廊下であったことです。実は桃井若狭助という武家も上野介に殺意を抱いていて、直前家来に介入されて刃傷を回避せざるを得なくなり、その直後、今度は浅野が刃傷事件を起こして失脚するのです。

二つ目に、吉良上野介が浅野内匠頭の妻瑶泉院に横恋慕をするエピソードがあり、上野介の好色さが描かれています。文楽では、瑶泉院にフラれその恨みが浅野イジメの動機になっていることがわかりました。こんなシーンは映画に無かったと思います。

三つ目は、室町時代に設定したとはいえ、太夫の語る浄瑠璃には含蓄のあるセリフがみ受けられます。例えば大序（１段目）の「鶴が岡兜改め」の終わりに出てくる「御蔵に入るヽ数々も、四十七字のいろは分け、仮名の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ国の、掟ぞ」[※1] の語り。事件の起こらぬ冒頭から、「仮名手本」という名称のことわりと、赤穂浪士への目立たぬ讃辞がさりげなく織り込まれています。９段目では、息子の力（力弥）が父の内蔵助に「峰の吹雪に岩をも砕く大石同然」[※2] と、討ち入りの決心を勧める個所で、岩を“大石”と隠喩でたとえながら幕府の目を逃れ、なおかつ大石たちへの意思を確認でき、幕府を揶揄する言葉とも想像できるのです。

ところで突然ですが、大阪市長である橋下さんのことです。昨年文楽協会への補助金カットを提言しています。つまり橋下さんは文楽の経済的自立を主張したのでした。私は橋下さんの政治姿勢は、従来の政治家には見られないユニークな視線で、実際共感するところも多くあり、斬新な政治家と感じています。とくに既得権や既成の価値観に対する破壊的心意気は、かつての全共闘運動などに通底していると思えるぐらいにアバンギャルドなのです。権力側からの全共闘運動というのは変な言い方ですが。

今回の助成金問題に、逆に文楽にかかわる人たちは、政治にイチャもんをつけられるくらいなら「金はいらん」と、橋本さんに対抗すればと無責任にも思っていました。

しかし、よく考えてみると、文化とかアートなどというものは、いわば脆弱な環境に必要な栄養分のような存在で、基本的には経済性のコントロールが機能しにくいものだと思うのです。津波や暴風雨にはなすすべがないように、権力や強権の介入には抵抗できず、時間をかけた文化や芸術ですら簡単に喪失する危うさを秘めています。一見衣食住の埒外にあると思われる文化やアートは、実は生活の根幹に根ざす“こころ”や“からだ”の滋養分であると考えます。ひ弱だけれど、すべての人が回帰していく場所だと考えたらいかがでしょう。

文楽は、歴史上たくさんの人たちに支持されてきた芸能だと思います。そして三業の知恵が切磋琢磨し、集団の超絶技術をあみだしてきたのに相違ありません。それは文楽そのものを観劇すれば明らかです。その恩恵に応え、私たち大阪の生活者が、文楽（文化と言い換えてもよい）のパトロンになればいいのではと考えるのです。もちろん自活自立は大切な命題ですし賛成ですが、拝金だけをありがたがる社会にしてはいけないとも思います。人間のこころを幸せにするための滋養づくりも大切な行為です。橋下さんには経済原理だけを強調してほしくは無い。悲惨な事件のあったＳ高校の核となるのは、実は多くの人々をも蝕む日本の軍隊的文化ではないのか。橋本さんは、これらの小市民性を打破しようとし、私たちに考えるヒントを挑発してきた有能な人材だけに、軍隊的暴力文化を拒否し、こころの施策にいっそうの希望を託したいと思うのです。

これは文楽だけに固執した問題ではなく、病や精神性など自力で生活が出来ない人、社交性が上手くない人たちなど、心や身体の調和をコントロールできずに困難をきたした人たちへの視線にもつながるということを伝えたいのです。

私が見てきた、通し狂言『仮名手本忠臣蔵』を見た限りホールは満員で、これまでの文楽をしのぐ本当に盛況な風景であり、しかもこのプログラムは連日満員御礼が続いて、現在も好況を見せているそうです。橋下さんの補助金カット発言は、このような結果を意図したうえでのことか否かはわからないけれど、逆説的効果を上げたようです。

赤穂事件を背景に『仮名手本忠臣蔵』の真髄は、下層の人々の心情や人情を描き、それでも権力への不服従を秘めた抵抗の文学だと思います。そして、文楽にはそんな名も知れず散っていった人たちを愛惜する作品も数多くあります。橋下さんも必ずや好きになると思われますので、これからも文楽劇場に通うことをお勧めします。

**※１・２は「仮名手本忠臣蔵床本集」から引用。下線部は佐々木**

文楽四月公演チラシから

**シリーズ「消えゆくものたちをたずねて」は、３月号をもって終了いたします。ながいあいだのご愛読を感謝いたします。（佐々木）**

# ボクのいい湯かげん

## 「ビルメンで働く人の実態調査」がまとまりました

「ビルメンが困難な人を生み出しているのか、それとも、困難を抱えた人がビルメンに来ているのか」。二月の第七回目の「政策入札研究フォーラム」で、大阪ビルメン協会の福田久美子さんはそう語りかけた。「かって戦前の大阪市社会事業家が見たような都市の困難がビルメンに再現されているかのようだ」、福井県立大学の吉村臨兵教授はそうコメントした。証券アナリストの小松伸多佳さんは、「仕事が人生の中心とは考えていないが、けっして不真面目ではない人たちの居場所がビルメンにあるように見えた」と発言した。三人ともに含蓄のある発言で、心に響いた討論だった。

討論の素材は、大阪ビルメン協会とエル・チャレンジが共同で実施した「ビルメン業で働く人の雇用と生活の実態調査」だ。調査は、「収入が低く、男性の未婚が多い」、「賃金は低いが、長く働きたい」と思っている、「高齢者が多く、若い人が少ない」、「障がい者と働いた経験を持つ人が多い」などの特徴を記した。また、ビルメンで働く人の家計調査も実施されたが、低賃金で単身の生活に住居費が重くのしかかり、生活習慣病を想起させる極端に貧しい食生活も垣間見えた。シンプルだが、噛むほどに味がある素材が、高見一夫さん（A’ワーク創造館館長）の丁寧な仕事によって、まな板に乗せられた。調査結果は、エル・チャレンジや㈱ナイスのＨＰで公表されているので、ご覧いただきたい。

ボクは、福田さんが言う「困難を抱えた人を包み込む」現場を「中間労働市場」と表現し、ここに政策入札のような社会政策があればと言い続けてきたが、言葉が足らないと感じている。建築用語の「シンプル・モダン」とは「簡素こそ現代風」ということだろうが、我が国の雇用制度も福祉制度も装飾が過ぎる。賃金も低く「都市雑産業」としか言い表せられなくても、戦前の大阪市の社会事業家は、そこに近代の家庭、コミュニティの礎となる社会福祉に思いを馳せていたのだろうか。はたまた、働くことが人生の中心ではないと、「建築」ならぬ「減築」で、ビルメンに働きだした若者達と一緒に新しい社会福祉を創っていくことになるのだろうか。

ともあれ、ボクは、困難を抱えた人を包み込んだビルメンという現場に、「施設なき授産」とか、「総合評価入札」とか、「就労支援費込労務単価」などの提案をしてきて、それが「障がい者と働いた経験を持つ人が多い」現場と立証されたことを誇らしく思った。そして、もっと「シンプル・モダン」な社会福祉をこの現場で探求していこうと思った。それは、その昔の大阪市の社会事業家とつながっているし、近未来の人たちの働く姿につながっている。

㈱ナイス代表取締役 冨田一幸



# 防災・減災ウィーク開催！！

もしも「大地震」が、「大津波」が、「大火災」が、この西成区北西部の町で起こったらあなたはどうしますか？このような災害に備えておくと安心な知識をみなさんに発信するのが「防災・減災ウィーク」です。この機会に今一度災害・防災について考えてみましょう。

## （株）ナイス参加イベント

### 東日本大震災で困ったほんとのところ

**東日本大震災の復興支援に関わって見えた本当に困った部分を体験者が告白！**

●日時：3月7日（木）午後7時～9時
●場所：カフェ・インク
●講師：川浪剛さん

### みんなで作ろう！人形劇エーヤンダー

**家庭に眠る「手袋・軍手」を使って防災人形劇を一緒に作りましょう！**

●日時：3月9日（土）午後1時～4時
●場所：カフェ・インク
●講師：田中やんぶさん・
A-yan!! 関西をアートで盛り上げるNPO

### 災害に備えませんか？

**「建物の耐震クイズ」「災害時の安否確認方法体験」「LED懐中電灯プレゼント」**

●日時：3月10日（日）午後1時30分～
●場所：市民交流センターにしなり

### 防災・減災いろいろ体験コーナー

**簡易トイレ作りや、可搬式ポンプでの消化訓練など様々な体験コーナーが揃っています！**

●日時：3月10日（日）午後1時30分～
●場所：市民交流センターにしなり

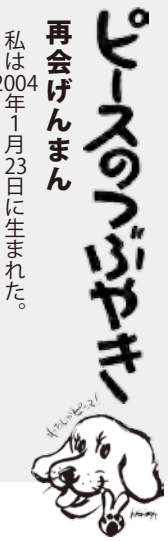
上記のほか「被災地特産品を活用した復興支援」として、Café＆bakeryビアン、ベッラファーベ、鶴見橋くらし食堂にて被災地の郷土料理や特産品を活用したメニューを期間限定で提供いたします。ぜひご来店ください！

## ピースのつぶやき

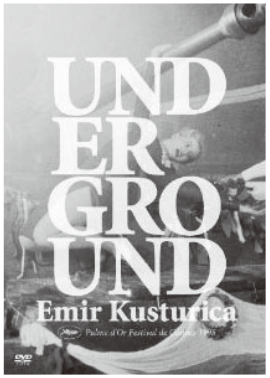
**再会げんまん**

私は2004年1月23日に生まれた。
私は6匹きょうだいだった。
まだ目の見えない6匹は寄り添い温まった。
お母さんのお乳を6匹で取り合った。
お父さんの後ろを6匹で追いかけた。
でも2ヶ月後、6匹はお別れをした。
私は新しいお父さんお母さんが出来た。
新しい4人のお姉ちゃんも出来た。
新しい家族で冒険と思い出をたくさん作った。
そんな私ももう9歳。少し歳をとりました。
いつの日かきょうだい6匹逢えたなら、
みんなの冒険、思い出話を、
時間忘れて語りあいたい。
その日がくるまで、
もっと思い出ふやしておこうワンワン!!

MA



hidarimakiの
# この逸編
# アンダーグラウンド




監督/脚本：エミール・クストリッツァ
音楽：ゴラン・ブレコヴィッチ
キャスト：ミキ・マノイロヴィッチ
ラザル・リストヴィスキ
製作：95年仏＝独＝ハンガリー
カラー作品／150min
DVD発売元：㈱紀伊國屋書店

自らの国家を希求しながら、多民族や多宗教の異文化を抱え、しかもオスマン、ハスブルグなど帝国や列強国の影響を受け続けてきたバルカンの諸民族。バルカン半島は東欧の火薬庫ともいわれた。

第一次大戦の勃発はサラエヴォだった。その終戦後に建国されたユーゴは第一のユーゴといわれる。そして「第二次大戦後のユーゴは、『七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家』という表現に端的に示される、複合的な国家であった」※と語られるように、ユーゴスラヴィア国は第二次大戦後、第二のユーゴを再建した。そして東西ドイツ統一を皮切りにして 90 年代の前半、民族問題を抱え５つの国に分裂してしまった。

『アンダーグラウンド』は 41 年、共和国の一つセルビアの首都ベオグラードに侵攻するナチスに対し、パルチザンの楽隊たちが軽快なトランペットを鳴らしパレードで気勢を上げる場面から始まる。この映画の第二の主人公は音楽だと僕は勝手に言い切ってしまう。

猥雑で凄まじくエネルギッシュなロマ（ジプシー）音楽は、映像と縦横無尽に渡り合い全編を大音で鳴り響かせる。狂乱と郷愁と哀感のある旋律やリズムは、僕が小さな頃サーカスやイベントの客寄せに雇われた、ジンタやチンドン屋の楽隊の演奏そのものだ。聴く音楽すべてが観客を圧倒させ、150 分という長尺フィルムをあっという間に通り過ぎた。

そしてこの音楽を担当したのが監督と同じサラエヴォ出身のゴラン・ブレコヴィッチだ。クストリッツア監督とは『アリゾナ・ドリーム』（なび 10 年７月号参照）のサウンドでもコンビを組んだ。この 95 年上映の『アンダーグラウンド』で流れるロマミュージックは、２年後再び僕の耳に戻ってきた。トルコの歌姫セゼン・アクスが発表した『喜びも悲しみも』というアルバム中に収録された「それはあなた」「月の光」「カラシニコフ」で、それらは映画で演奏されたものに歌詞が与えられた。迫力満点のセゼンの嘆き節が聴ける。しかもこのアルバムを製作しているのがブレコヴィッチだ。バルカン半島とトルコにつながる民俗音楽の地脈、血脈をベースに、聴くものが躍りだすほどの素敵なポップスだ。

また、監督自身、「エミール・クストリッツァ＆ノー・スモーキング・オーケストラ」というバンドを引き連れ、ロマのエキスを背骨に、ロックやパンク果てはクラシックの素材などもパロディとして取り込み、新しいスラブ世界への希望の音楽として聴かせてくれた。これは『ウンザ・ウンザ・タイム』というＣＤアルバムで、2000 年に発表された。

『アンダーグラウンド』は、戦時下、１人の女を２人の男が取り合う話で、一方の男が共産党リーダーにして武器弾薬類を密売もするマルコ。もう一人は酔いどれのパルチザン武闘派闘志で女好きというクロ。いずれにしても大言壮語のいかがわしいイカサマ師たちで、権力や政治をおちょくる戯画的人物として描かれた。

私利私欲のマルコが地下にでかいシェルターを築き、ここで武器弾薬を作らせ、果てはクロをも密閉させて女から遠ざけ女を独占する。ナチスドイツが敗走後も、防空サイレンやデートリッヒが歌う「リリー・マルレーン」のレコードを、通気孔を通して地下のパルチザンたちに聴かせ臨戦状態を演出する。地下で閉じ込められた人たちは数十年もの間戦時体験を余儀なくされ、主人公たちの我欲につきあわされる。

壮大なウソとごまかしに加え、祖国そのものを時代をこえてだまし続ける政治への暗喩として描くが、そんな深刻な歴史をすごいスケールと、スラプスティクな喜劇、そしてシュールで幻惑的な映画に仕立てたクストリッツアの映画術に驚嘆した。映画史に素晴らしい作品が刻印された。

チトー共産党への皮肉。いつの間にか地下シェルターに地下道が走り、北や南に逃げ惑う難民が逃亡するシーン。そして突然現在のボスニア内戦（そしてここでもマルコが武器商人として暗躍している！）。政治を私欲に利用するもの、いまだ政治にだまされ続ける私たち。そんなメタファーを感じさせて、ユーゴ６つの共和国の一つボスニア・ヘルツェゴヴィナで生まれた監督が作ったまさに骨太の逸編であった。

とりわけラストのシーンが印象的だ。ドナウ川底から戦火で死んだ妻、息子、兄弟、友人、知人、楽隊員、動物たちまでがゾンビのように甦えり、恩讐を越えて再会する。「苦痛と悲しみがなければ語られない」と漂流するわが祖国に集まった人々に、僕はこれを『8 1/2』（63 年）のラストでみられた、人々への許しや和合を表現したフェリーニだと思った。きっとクストリッツア監督は、フェリーニ監督への敬意を最後で表したのかもしれない。

ｈｉｄａｒｉｍａｋｉ

※「ユーゴスラヴィア現代史」芝仙弘著・岩波書店

セゼン・アクス / 喜びも悲しみも (CD)

E・クストリッツァ＆
ノースモーキング・オーケストラ
ウンザ・ウンザ・タイム (CD)

**シリーズ「この逸編」は、３月号をもって終了いたします。ながいあいだのご愛読を感謝いたします。**　**（hidarimaki）**